

【結果】肝癌を合併した選択的シャント症例には、肝切除あるいはRFAを施行し、全例耐術可能であった。早～中期予後では、選択的シャント例で静脈瘤再発を3例、シャント閉塞を2例、静脈瘤からの再出血を1例に認め、非選択的シャント例では、門脈血栓と肝性脳症を1例ずつ認めた。

【結語】難治性食道胃静脈瘤に対して選択的シャント手術は理想的な手術法であるが、患者の全身状態・肝予備能・緊急度を考慮した手術法の選択が必要である。

29 shear stress 理論からみた術後高ビリルビン血症の病態

平野謙一郎・佐藤 好信・山本 智
竹石 利之・大矢 洋・中塚 英樹
小林 隆・渡辺 隆興・小海 秀央
高野 可赴・黒崎 功・白井 良夫
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

大量肝切除および過小グラフトを用いた生体肝移植後における遷延する高ビリルビン血症は術後しばしばみられる重要な課題である。以前より我々は肝切除および肝移植後に過剰な門脈圧が術後肝機能に大きな影響を与えている可能性を報告してきた (shear stress theory)。さらに近年肝内ビリルビン産生の律速酵素である hemeoxygenase (HO) およびその副生成物である carbon monoxide (CO) による胆汁分泌機構への影響が報告されている。今回我々はラット大量肝切除における動物実験データおよび生体肝移植における臨床データを提示し術後高ビリルビン血症の病態を検討した。

第45回新潟脳神経外科懇話会

日時 平成16年12月11日(土)
午前10時～午後3時
会場 新潟グランドホテル
波光の間 (5F)

一般演題

1 脳血管攣縮期における diffusion - perfusion mismatch

大隣 辰哉・柿沼 健一・鬼頭 知宏
江塚 勇

新潟労災病院脳神経外科

【目的】当院では、脳梗塞急性期の thrombolysis の indication 決定のため、diffusion - perfusion mismatch が有効であることを既に報告してきた。一方、くも膜下出血後の脳血管攣縮にも、MRI (time - intensity curve, diffusion weighted image (DWI)) および SPECT の同日撮影にて脳血流動態の評価と症候性脳血管攣縮の予知を試みてきた。これらを発展させ、diffusion - perfusion mismatch によって、脳血管攣縮期の血行動態をさらに詳細に捉えることを試みた。

【方法】2004年6月から2004年10月までに当院で clipping を行った SAH の11名のうち検査を行ったのは9名、このうち diffusion - perfusion mismatch が捉えられるかについて検討した。MRI と SPECT は同日撮影で MRI は DWI と PWI (MTT, CBV, CBF) で評価、SPECT は ¹²³I-IMP ARG 法で CBF 測定を行った。

【結果】2症例において術後経過は良好であったが、傾眠傾向および麻痺の増悪がみられ、その時期に diffusion perfusion mismatch を捉えることができた。責任領域の PWI は mean transit time が遅延し、CBF で左右差を認めず、CBV は若干上昇を認めた。

【結論】くも膜下出血後の脳血管攣縮期について、diffusion - perfusion mismatch を MTT, CBV,